令和5年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	1　全国学調やみえスタの結果を分析し，授業改善をすることで，一人ひとりの学びの質の向上を図る。 2　学期に1回，家庭学習強化週間を設け，家庭学習の充実を図る。 3　朝の15分学習を補充学習として行うとともに,異学年でのグループ学習「まなびっこタイム」を実施し,知・徳・体の育成を計画的に行っていく。 4　図書巡回指導員を活用しながら読書活動を充実させ，貸出し冊数を低中学年1人当たり50冊以上，高学年1人当たり40冊以上を目指す。 5　学習ボランティアを活用し，児童一人ひとりに，よりきめ細かな学習支援を行う。 （成果と課題） 1　4,5,6年生を中心に弱みの部分を分析し，重点的にその単元の計画を考え，実践した。互いの授業を公開して見合い,改善点について意見交換をする「授業力UP週間」を実施した。 2　強化週間をきっかけに，家庭学習の習慣や読書習慣を身につけられるようはたらきかけた。 3　3年生以上では，週3回朝の15分間の学習時間に，漢字や計算を中心に復習や反復学習に取り組んだ。徐々に朝の学習として定着し，集中して取り組むことができた。異年齢集団で行うことで，学力だけでなく，子どもたちの人間関係の育成を目指したい。また，「読む・書くシート」（※1）等の活用を定期的に取り組んでいきたい。 4　図書巡回指導員と連携を図りながら，学校図書館の環境の充実を進めた。各学年，年間2回以上指導員による図書の授業を計画し，実践した。また，「各学年へのおすすめの本」をすべて読んだ児童を集会で表彰したり，本の貸し出しが多かったクラスの紹介したりするなどして，読書への意欲づけを行った。課題として，高学年の図書貸出冊数が少ないことが挙げられる。高学年は他学年より週あたりの国語の授業時数が少なく，週時間割に図書の時間の設定がしにくいので，曜日を決めて借りる等定期的に借りるように声かけをして，意識を高める等していく必要がある。 5　5月以降は，ボランティアを募り,保護者を中心に地域の方15名に協力を得，読み聞かせや学習のボランティアとして子どもたちの学びに携わっていただいた。今後は，学習ボランティアの要請を増やしていきたい。	・いろいろな工夫で児童に学習環境をつくっていただいている。 ・まなびっこタイムは今後も継続してほしい。 ・高学年児童が定期的に低学年児童に本の読み聞かせをするのを継続してほしい。 ・児童も保護者も「わかる授業」「考える授業」についての評価が低いように思う。興味をもって学習に取り組み，考え合う授業にも取り組んでほしいと思う。 ・読書について，児童と保護者のアンケート結果に差があるのが気になる。読解力はすべての教科の基本となるものであり，読書の時間をもう少し増やしてはどうかと思う。 ・家庭での読書習慣が身につくように，保護者も家で児童と共に本を読む時間を捻出できないか。 ・学期ごとの読書の単元を活用し，単元を発展しての読書に取り組むとよいのでは。子どもたちにおもしろい本をどんどん紹介してほしい。 ・学習ボランティアを，親世代だけでなく祖父母にも協力してもらうようにし，来てもらえる時間・人数を確保してはどうか。 ・学習ボランティアも良いが，中・高学年が低学年の学習を支援するのもよいのではないか。（九九を聞いてあげたりする等）	1・学力調査，みえスタディチェックについては全ての教員で採点し校内研修での分析，授業改善に取り組む。 ・縦割り学習同様，学年の授業においても小グループを活用し，対話の重視とつながりを生み出す。主体的な授業を目指し，指導力向上のため授業公開週間を実施する。 2・家庭学習強化週間をきっかけに，宿題(家庭での学習等)の内容等について考え，保護者に発信していく。 3・縦割り学習は今後も継続し，子どもたちが学習計画を立てたり，自分たちで考えて学習する素地を作り，非認知能力育成の基盤としていく。 4・引き続き，貸出冊数の目標値を一律同じではなく低，中，高もしくは低，高で分けて目標値を設定する。 ・高学年が本を借りるようなしかけを考えていく。 ・巡回指導員さんのさらなる有効活用。 ・読書記録カードの継続 ・貸出冊数だけでなく，別の評価項目を用意し，子どもたちのモチベーションを高める。 5・必要なニーズを把握し，様々な分野でのボランティアの協力を積極的に要請していく。 ・学習ボランティアを再発足して1年になる。来年度に向けて募集範囲や内容等について見直していく。

ＩＣＴの活用	1　日々の授業の中で児童の一人一台パソコンを活用し，学びの質を高め，教育効果を上げる。 2　縦割り班学習でのICT機器活用を通して，上級生から下級生が教わることで，機器の使い方のスキルアップをはかり，学習での活用場面を増やす。 3　ICT支援員（※2）を活用して教員の研修を行うことで，教職員のICT活用能力を高め，ICT機器（※3）の特性を生かした授業を工夫する。 （成果と課題） 1　ICT機器の活用は進んできたが，学年によって活用頻度に差が生じていることが課題としてあげられる。 2　高学年を中心に異学年でICT機器を活用し，教え合い・学び合いができていた。 3　ICT支援員から授業での具体的な活用事例を提供していただいたことで，各学年，ICT機器を活用した活動を取り入れる頻度が増えてきた。	・ICT機器の導入により，教職員の負担軽減や情報収集（児童アンケート等）に生かされていると思うので，大変よい。今後も継続してほしい。 ・現在，ICT機器活用は大切だと考える。今後もICT機器活用を更に取り入れてもらいたい。 ・毎日使用することでスキルアップになると思うので，日々活用していってほしい。 ・ICT活用を校内研修に取り上げてもよいのでは。いろいろな授業ができておもしろいと思う。１人１台のパソコンがあるのだから，恵まれていると思う。 ・異学年での教え合い，学び合いに，支援員のサポートがあれば効率が良く，児童の自主的な能力の向上につながるのではないか。 ・ICT活用能力は向上していると評価できる。学習用ソフトが学力向上に役立っているかを検証し，効果的な授業に活用してほしい。 ・スマートフォンの危険性を認識できる授業で，被害者ばかりでなく，加害者にもなりうる可能性があることを教えてほしい。	1・来年度から主に活用するソフトが変わるため，校内研修と絡めながら定期的に職員向けのICT研修を行い，より効果的な活用ができるように努める。 ・先進校視察で学んだことを還流する。一人のスキルを職場全体のスキルにつなげるようにし，全学年で発達段階に応じたICT活用ができるようにしていく。 2・縦割り班で調べたことを整理したり，まとめて発表したりする中でマッピング，スライド（プレゼンテーション），ドキュメント（ワープロ）等を活用した。ICT活用スキルアップだけでなく，さまざまなことを学習することができたので，今後も継続していく。 3・ICTサポーターの来校日をあらかじめ職員に周知し，授業での児童支援や職員研修等で効果的に活用できるようにしていく。 ・中学年から高学年を対象に，ネットモラルに関する出前授業を取り入れる。
長欠減少	1　学級づくり・仲間づくりを進め，一人ひとりの学校での居場所をつくることで，不登校の未然防止に努める。 2　日常生活の様子が気になる児童の情報を職員間で共有する機会として子ども理解会議を開くとともに，必要な支援を早期に行い，一人ひとりが安心して過ごせる学校づくりに取り組む。 3　全校の欠席者を毎日一覧表に記入することで，欠席が続いている児童を明確にし，児童の変化に気づき，支援できるようにする。 （成果と課題） 1　日々の学級経営において一人ひとりを大切にすることを心がけてきた。いじめアンケートや児童アンケートの際には，全員に個別に話をする機会を設ける等し，居場所がない状況をつくらない取組を行ってきた。 2　職員会議後には必ず児童の情報共有の機会を持ち，対応について相談することができた。 3　新たな不登校を生まないため，気になることがあって休んだ児童には電話連絡や家庭訪問を行って児童や保護者の思いや困り感に寄り添ったり，保健室でゆっくり話を聞いたりするなどして，早めに手を打ち，児童が安心して登校できるよう支援することができた。また，欠席が多い児童について，今後も保護者との連絡を密にし，不登校にならないよう支援していく必要がある。	・1学年の人数も少なく，クラス替えもないことで，友達関係が固定されてしまうことが心配だ。 ・不登校を生まないために，その原因の探求と対策が重要だと思う。 ・一人ひとりの児童を注視し，学習の強み・弱みを把握し，悩みを見つめる努力が必要。 ・学校外では同じ地区の児童でも共に遊ぶことが少なくなっている。少子化で児童数が減少し，且つゲーム機の普及により家庭内で過ごす時間が多いようだ。反面，学校内で高学年と低学年が共に遊ぶ機会を設けていることで，児童間に良い交流がでていて，それが登下校時の会話からも窺える。そのような交流機会を増やすことで，児童の意識が良い方向に変わればいいと思う。 ・学校間交流をすることで中学校進学時に戸惑いなくスムーズに適応できるのではないか。	1・不登校の未然防止，いじめの早期発見のために，担任を中心に児童との関係づくりを今後も行っていく。 2・定期的にケーススタディを実施し，不登校児童を生まないための学級づくりについて全職員が学習する機会を設ける。 3・児童の様子の変化により早く気づくために，家庭と連絡を取り合いながら保護者と協力して児童を見る。 ・状況によっては学校だけでの対応は難しい場合があり，その際は保護者と関係機関をつないでいく。 4・学校間交流については，予算面や時間の確保等，実現するにはさまざまな課題があるので，じっくり検討していく必要がある。

地域連携	1　授業参観や学校行事等の学校公開を適時実施し，本校の教育活動について，保護者や地域の方の理解を深める。 2　学校だよりや学校運営協議会，PTA会議等で，積極的な情報発信を行う。 3　地域・外部人材の有効活用と，社会に開かれた教育課程の実現を進める。また，学習ボランティアを再発足し，読み聞かせや学習での協力を得て，学習効果を高める。 4　保護者・地域と連携した安全・安心の取組として，「ながら」見守りを進める。 （成果と課題） 1　今年度は授業参観や運動会は制限なく見ていただくことができた。マラソン大会は校内で風邪・インフルエンザ症状の児童が多く，前々日まで6年生が学級閉鎖であったため，安全に開催することができないと判断し，中止した。 2　学校だよりを12月末現在で22号発行し，発行したたよりはホームページにも掲載した。また，ホームページでは学校運営協議会の報告も掲載している。 3　再発足した学習ボランティアを活用し，プールや調理実習，図画工作の補助，読み聞かせ，図書環境整備，学校行事運営の補助等，さまざまな支援をしていただくことができた。また，4～6年生の縦割り班で鈴西小学校の歴史についての探求学習や2年生の町たんけん，5年生の稲作体験，1･2年生の生活科の授業では，地域の方々の協力をいただくことができた。 4　地区市民センター等を通して地域の方々に「ながら」見守りに登録していただき，子どもの見守り活動をお手伝いいただくことができた。	・学校だよりをいつも読ませてもらっている。学校の状況がよく分かるので，今後も続けていってほしい。児童のがんばっている姿をどんどん発信してほしい。 ・地域の方との連携で，地場の強みや産地（特産物）の紹介など，地元ならではのものを伝えてほしい。 ・地域の方に見守られているという安心感は，児童にとってもすごくありがたいことだと思う。 ・学校運営上の困りごとをもっと運営協議会で話題にしてはどうか。 ・ながら見守りは継続してもらいたい。（特に児童数の少ない地区の登下校） ・地域を巻き込んでの活動は大変よいと思う。 ・ホームページが更新されていることを保護者にアピールするのもよいのでは。見たことがない人もいると思う。	1・できる限り学校公開を行い，子どもの様子を参観できる機会を確保する。 2・学校だよりや学年通信では，行事や業務連絡だけではなく，子どもたちのがんばっていることや日常生活での良かったことなどを積極的に保護者へ伝えてきた。今後も学校の状況が伝わるよう内容を工夫していく。ホームページの更新も随時しているので，保護者に周知する。 3・地域や外部の人材を活用した授業を今後も継続して行う。学習ボランティアについては，今年度再発足し，さまざまな場面で協力していただくことができたので，さらに活躍の場面を広げていきたい。 4・今後も市民センター等を通じて「ながら」見守りボランティアを知らせ，多くの方に登録いただけるよう地域に伝えていきたい。
生徒指導　子ども理解　安全確保	1　あいさつ運動を実施し，90%以上の児童が自分から元気な声であいさつできるようにする。 2　いじめゼロを目指すとともに，いじめアンケートを年3回実施し早期発見に努め，早期対応を行う。 3　一人ひとりの違いや特性への理解を深める授業を行い，安心できるクラスづくりを推進する。 4　子ども理解会議と校内支援会議（年間35回以上）の充実を図る。 （成果と課題） 1　児童会を中心にあいさつ運動の取り組みを行ってきたが，更に意識を高めていく必要があるように感じた。今後は児童会以外の児童も巻き込みながらあいさつ運動を行う必要がある。 2　全職員でいじめアンケートの実施と結果の共有に取り組むことができた。 3　子どもたちが一人一人の個性を認め合えるように，道徳や学活の授業の中で呼びかけ・指導を行うことができた。 4　支援会議やケース会議を定期的に行い，児童に合ったよりよい指導を考えることができた。	・あいさつ運動が成果を上げていると評価する。家庭内での親子のあいさつが出発点なので，その部分も親にアピールすべきである。 ・自分から元気なあいさつができるようになってきている。高学年になるにつれて，はずかしいという気持ちが出てくるのではと感じるが，鈴西小の児童はあいさつがよくできると聞いている。 ・不審者の問題，または恥ずかしさからあいさつができない児童もいるのではないか。地域の大人から積極的にあいさつをしていくことが大切と考える。 ・大部分の児童が元気にあいさつしている。特に低学年の児童はしっかり応答してくれる。学校，家庭で日常的に指導されている結果だと思う。まず家庭での習慣が大切だと思うので心掛けたい。 ・鈴西小の子どもたちは，地域の人等相手を知らなくても元気に自分たちからあいさつができていて，とてもよいと思う。中学校へ行ってもそれは変わらず，みんな元気にあいさつをしてくれる。とても立派なことだと感じる。	1・学年や相手を問わず，誰にでもあいさつできる習慣を身につけさせるために，家庭への協力も呼びかける。 ・あいさつ運動の形骸化防止のため，新たな取り組み内容を考える。 2・　いじめについては，アンケートにより発覚したものには担任だけでなく，複数の教師で迅速かつ丁寧な対応をしていく。また，未然防止として日々の児童観察を丁寧に行い，教師間の情報交換を積極的に行う。また，対処したことについては子ども理解会議や打合せで情報共有していく。 3・　今後も校内研修や校外の研修へ参加し，子ども理解に努め，よりよい集団作りに努める。 4・　両会議とも今後も継続して行う。特に進級に伴い担任が変わる場合においては，担任間の引継ぎを丁寧かつ確実に行うために時間の確保等に努める。

教職員の働き方改革	1　抜本的な業務縮減として，学校行事の精選と業務の平準化を行う。 2　ICTを活用した業務改善（会議のペーパーレス化，情報共有，出席簿管理，通知表，指導要録，アンケート等）を行う。 3　QOL（※4）を向上させ精神的ゆとりをもって職務に臨めるように，「MY定時退校日」を設定し，月に1人当たり2回以上定時退校した職員の割合90%以上を目指す。 4　学習ボランティア，スクールサポートスタッフ（※5），学習指導員（※6）の効果的活用により，職員全員の時間外勤務を月45時間以内を目指す。 5　業務の効率化により時間を生み出し，児童と触れ合う時間を多く取れるようにすることで，児童理解を深め，よりよい学級経営・学校経営を目指す。 （成果と課題） 1　学校行事については，児童の実態や職員数などの現状にあわせた実施方法を検討することにより，適正規模で実施することができた。また，業務の平準化については，ここ数年で進んだが，教員アンケートからまだまだ改善の余地があると考える。 2　ICTの活用によりかなり業務改善が進んでいる。児童アンケートや保護者アンケートもWebでの回答とすることで業務改善を進めることができた。保護者アンケートはWeb回答のみでなく用紙での提出も可としたことで，昨年度より回収率が上がったが，100%回収し保護者のニーズを把握できるようにすることが今後の検討課題である。 3　定時退校は90%以上達成できた。多くの学校が定時退校日を一律で設定しているが，本校では,各個人で設定する「My定時対校日」としているので，自分の帰りやすい日に設定するのでこの達成率につながっていると考えられる。 4　今年度は12月末で45時間以内に収まっている。これには，スクールサポートスタッフが印刷や掲示物の作成等の業務を担うことで時間外勤務も昨年以上に縮減につながっている。4月から時間外月45時間を超えた職員はなし。今後も業務の分担の見直しや改善を図るなど工夫をし，職場のよりよい関係づくりにも尽力し，さらなる時間外労働の縮減を目指していきたい。 5　業務の効率化により生み出した時間を，児童理解，教材研究，心身のリフレッシュにあてることで，教育活動の質の向上へとつなげることができた。	・以前に比べ，教職員の時間外労働も減り，負担が軽減されてきたが，やはり大変なのではないかと思う。今後も様々な方法で教職員の負担をさらに軽減できると良い。 ・業務を分担，平準化するのは大変良いと思う。 ・業務縮減のためにICTやマチコミアプリの活用をさらに進めてほしい。 ・学校から保護者への便りも，ペーパーレスでもよいのでは。なかなか学校からの便りを親に渡さない子どももいるので，メール配信の方が助かる人も多いのではないか。 ・外部からのサポート要員の増員を要望したい。 ・先生方の負担が減っているのはうれしい。その分，子どもたちを見つめることにつなげてほしい。 ・時間外労働が月45時間以内に収まっているのはとてもよいことだと思うが，45時間にとらわれて「やりたいこともひかえよう」ということにならないでほしいと思う。 ・先生方の心身のリフレッシュのため，今後も業務改善に努めてほしいと思う。 ・時間も身体も精神も，余裕があることはよりよい教育活動につながっていくと思う。	1・行事については来年度に向けさらに見直しを進めていく。また，業務の平準化についても，次年度へ向けた会議の中でできる限り努めていきたい。 2・ICT機器活用による業務改善は定着しつつあるので，今後もさらに効率を上げていきたい。 3・これまで同様に，一律で定時退校日を設定せず，個人で設定するということを継続して行う。 4・スクールサポートスタッフの有効活用を今後も継続する。業務の分担や改善を図ることで仕事の効率を上げ，教育活動の質を保ちつつ時間外労働の縮減を進めていく。 5・業務の効率化により生み出した時間を有効活用し，教員の人間力を高め，教育活動の質の向上へとつなげることを今後も継続していく。